

# リービ英雄と温又柔 —台湾との関わりを持つ外国人日本語作家—

名古屋大学大学院博士課程 張 雅婷

## はじめに

1990年代以降、日本語で小説の創作を行なう外国人作家たちが日本文壇に続々と登場する。彼らは、従来の植民地文学や在日文学の歴史的要素とは違って、あえて自らの意思で母語以外の日本語を創作の手段として選択したのである。その先駆けとなるのは、デビュー作の『星条旗の聞こえない部屋』(1992)で野間文芸新人賞を獲得し、西洋出身の日本語作家として脚光を浴びたリービ英雄(アメリカ)と言ってもよいであろう。それ以降、デビット・ゾペティ(スイス)、楊逸(中国)、シリン・ネザマフィ(イラン)と温又柔(台湾)らが登場し、各種文学賞を受賞して、注目されている。その中で、リービ英雄と温又柔という二人の作家を見ると、実人生や創作の中で「台湾」が重要な位置を占めていることが分かる。リービは台

湾で子供時代を過ごしているが、温は台湾人の両親を持ちながらも、日本育ちである。二人はそれぞれ異なる境遇におかれてはいるが、同じ日本語で台湾に対して抱える思いをしばしば作品の中に書き入れたのである。

## 1. 台湾との関わり—作家の生い立ち

リービ英雄(Ian Hideo Levy, 1950~)は、ユダヤ系アメリカ人で、父の外交官の仕事のため1950年代後半を台湾で幼少期を過ごした。その後、両親の離婚でしばらく母と重度の知的障害を持つ弟と共に香港に滞在した後、アメリカに戻った。一方、父は台湾で知り合った上海出身の中国人女性と再婚し、横浜のアメリカ領事館に転任した。そして、1967年に横浜の父を訪ねた体験が、彼の日本語人生を切り拓く契機となったのみならず、デビュー作の創作にも繋がった。帰米後、大学で日本文学を専攻し、万葉集の研究で博士学位を取得した。プリンストン大学とスタンフォード大学で教鞭を執ったが、1990年に作家活動に専念するために日本に移住した。現在は法政大学の教授である。

一方、温又柔(おん・ゆうじゅう, 1980~)は台北生まれ、3歳の時に父の赴任に伴って日本に移住した。2006年法政大学大学院を修了し、彼女の創作活動に励む。リービ英雄とは師弟関係でもある。2009年、小説の「好去好来歌」で第33回すばる文学賞佳作に選ばれた。その後、文芸誌『すばる』に「来福の家」(2010)を発表し、翌年にこの



リービ英雄の著作集



温又柔の初めての小説集『来福の家』(集英社、2011)が刊行された。

二作を併録した同名の小説『来福の家』(2011)を刊行した。小説に登場する女主人公は、何れも作者自身を思わせる人物である。台湾語や中国語、日本語の飛び交う家庭環境で育てられる中での、自分の名前が絡み合った文化、言葉やアイデンティティの葛藤を描き出した。また、日本植民地時代や戦後の台湾社会の状況も織り込んだ。他にも、手記の『たった一つの、私のものではない名前 my dear country』(2009)と小説「母のくに」(2011)がある。

## 2. 母語以外の可能性—日本語を表現手段として

なぜ日本語で書くのか？リービ英雄は17歳の時、新宿に家出した体験を機に、日本語の世界に投げ込まれた。それ以来、アメリカで日本文学研究や万葉集英訳などを行なう傍ら、日本の文壇とも交流を保ち続けた。そして、中上健次から「おまえも日本語で書け」との激励を受け、日本語で書き始めた。彼は、エッセイ集の『アイデンティティーズ』(1997)の中では、自分の人生の「時代」を区切る三つの言葉があると書いた。母国語とし

ての英語、子供時代の「第二母国語」としての中国語、そして思春期からの「継母国語」としての日本語。現在、彼は中国を訪ねる時に話し言葉としての中国語を使い、そこでの見聞や体験を日本語で書き続けている。

リービの17歳から始まった日本語人生とは違って、温は幼い頃から日本人と同じ学校教育を受けてきた。彼女は、名前や家で両親の使う言葉、入国管理局での手続きを除いて、自分の日本語や身振りが普通の「日本人」と変わらない。しかし、彼女は手記の中で「私は日本人じゃない、といつもどこかで思っていた。かといって、自分は台湾人だ、とはっきり思っていたわけでもなかった」という心情を吐露した。この揺れは、彼女の創作意欲を掻き立てる原動力ともなっているであろう。彼女は、リービの「継母国語」に倣えて、日本語を育ての母(語)のような「養母語」の存在と言った。また、温は大学時代に改めて中国語の習得を志し上海留学をする。そうした日本と台湾、さらに留学先の中国上海での体験を通し感じた「外国人」のままでいる自分は小説の中に投影されている。

## 3. 描かれた台湾—小説の紹介

リービは1993年に初めて中国の北京を訪ねた後、二作目以降の小説『天安門』(1996)、『国民のうた』(1998)と『ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行』(2002)に亘って、詳細に台湾での記憶を書き綴った。1950年代後半、彼の一家は台中にある日本人が残した木造家屋に住んでいた。それは日本時代に建てられた中産階級以上向け住宅群の「大和村」だが、戦後になって模範村と改称された。小説に描かれた台湾での記憶としては、高い塀に囲まれた庭付きの家に、用人のラオ・シエや、よく家に入出入りする国民党老将軍たち、さらに家族を崩壊させる中国人女性までも触れている。そして、彼の耳に入った「光復大陸」の音頭

や、映画館で流した「三民主義」、父に「Mao is crazy」と苛立たせた共産党の砲撃の描写からは、冷戦時代の雰囲気がとてもリアルに伝わってくる。彼は年譜やエッセイでは、台湾の家を「故郷」「自分の家」と言い続けており、自らの中国語を培った環境のみならず、両親が離婚する前の幸福感を味わった場所でもあったとしている。

さて、一方で台湾生れ日本育ちの温は、台湾をどう描いたのか。ここでデビュー作の「好去好来歌」を取り上げてみよう。この小説は、主に女主人公が日本で体験したアイデンティティの悩みや言葉の葛藤に力点を置いて書かれているものの、台湾への言及も多く見られる。両親の語りを通じて構築される「台湾」は、日本の植民支配や戦後の国民党統治、田中角栄首相による国交断絶などの特殊な政治状況を抱えている。また、そこに挿入される母の家族の物語に描かれた、大陸からの漢族移民と思わせる故里がない曾祖父、日本統治時代に日本語の教育を受けた祖母、1950年代に小学校で中国語を強制された母親などの描写には、台湾の複雑さがよく表現されている。温は、後の「来福の家」や「母のくに」では、歴史の重みを減らしたが、依然多様な角度で台湾との繋がりを題材にしている。

## 終わりに

以上のように、リービ英雄と温又柔の創作活動

をみることで、この二人がなぜ日本語で書くか、また何を書くかという疑問が解明されたのではないかと思う。また、リービや温にとっては、日本語で書くこと自体がそれなりに重要な意味を持っており、台湾は、二人の実人生や小説創作において、リービの子供時代の記憶や温の両親の故郷として看過できない要素でもある。

リービ英雄の『星条旗の聞こえない部屋』(1992)は、2011年6月に英語版『A Room Where The Star-Spangled Banner Cannot Be Heard: A Novel in Three Parts』(2011 Columbia University Press)と中国語版『聽不到星條旗的房間』1(2011 聯合文学)が同時に刊行された。現在、彼が日本語で書いたものは日本人のみならず、翻訳を通してより広汎な読者に届けられている。つまり、彼が海を渡って日本に移住し、日本語で書く作家を志すとは正反対に、彼の小説は訳されて海を渡って広がっていくのである。これは、まさに彼の主張する日本の単一民族イデオロギーを超越した「日本語の勝利」の頂点に達しているのではないかとも思えるのである。

1 この訳書に収録したのは、「国民のうた」(1998)、「星条旗の聞こえない部屋」(1987)と「千々にくだけて」(2004)の三篇だが、原著の所収とは若干違っている。